短 報

外来頸肩腕障害患者に対する考察 (第1報)

Considerations of the Cervicobrachial Syndrome (Part 1)

近来、チェーンストアのチェッカーや、保母の頸肩腕障害が増加し、われわれ病院におけるこれらの患者の増加も、ここ1~2年著しいものがあるので、1972年度までの外来頸肩腕障害患者のまとめを行ない、大方のご批判をうけたいと思う。

対 象

われわれの病院でとり扱った職業起因性と思われるスーパー関係のチェッカー、公私立保育所、身障者収容施設の保母、その他タイピスト、キーパンチャー、電話交換手等の頸肩腕障害と思われる外来患者のうち、1973年3月末までに来院した約300人の中から、比較的資料の整備されている者を対象とした。これらのうち、前二者は比較的数量も多いので、一応職種別に分類し、他は一括して分類した。

1. 自覚症状について (図1-a, b, c): 図1は、産業衛生学会のアンケートのうち、いつもあると答えた者のみを図にしたものであるが、いずれの職種においても右の肩こり、腕のだるさ等を共通して訴えているが、チ

ェッカーでは、右肩こり、右腕のだるさ、手指のだるさの順に訴えが多く、保母では肩こり、頸のこり、腕のだるさの順になって、一般的に右側が強い。

下半身についてみれば、保母の場合他職種にくらべて腰のだるさ、痛さ、下肢のだるさを日常的に訴えるものが圧倒的に多いのが目立つ。

全身症状からみると、目や耳等の感覚器の症状は一般的に少ないが、体がだるいと常時訴えている者が多く、とくに保母の場合、約73%とはなはだしく高率である。その他、保母の場合、いらいらすとか、胃腸がわるいと答えた者が、他より多いこととあわせて職種の特徴であるかもしれない。

2. 日常生活の不便苦痛について (図2): 図2は、いつも感じていることのみをグラフにしたものであるが、第6項の、字を書くにつらいというのは、各職種とも半数以上が訴えている。日常的にも手紙を書いたり、レポートを書いたりすることに、苦痛を訴える患者が多

図1-a. 頸腕障害患者の自覚症調査 (1973. 3, 東神戸病院)

図1-b. 頸腕障害患者の自覚症調査 (1973. 3, 東神戸病院)

図1-c. 頸腕障害患者の自覚症調査 (1973. 3, 東神戸病院)

図 2. 日常生活の不便・苦痛について

いことと一致する。16項の、天候の悪い時に体の調子が悪いとか、17項の、冷房がづらいとか、21項の、ねつきが悪い、24項の、本をつづけて読めない、28項、じっとすわってられない、29項、横になりたい、30項の、痛みのためゆううつ等の項目もあながい共通して多いようである。

各職種別にみると、チェッカーでは6項と29項がとくに多いが、保母では21項以下の神経疲労を中心とする項目の訴えが多いのが特徴的である。その他の職種では、6項をのぞいて他はだいたい平均化されているようである。

3. C.M.I.; 頸運動; 筋力テスト; 皮膚温; レントゲン所見および初診時の治療方針については、続報にゆずりたい。

飾森 望, 岸本洋子, 石井俊三, 真鍋義雄

東神戸病院 (院長: 成味秀世)

Nozomu SIKIMORI, Yohko KISHIMOTO, Shunzoh ISHII and Yoshio MANABE

Higashi Kohbe Hospital (Director: H. NARUMI)

昭和48年10月17日受付